

【京都府青少年育成協会会長奨励賞】

「祖父の思いを」

南丹市立園部中学校 2年

松宮 栞



祖父が亡くなったのはおとしの夏、海の日でした。祖父は胃がんで亡くなりました。私と祖父の思い出はあまりありません。祖父は長崎に住んでいて、会えるのは夏休みくらいでした。私の記憶の中にある祖父は毎日忙しく、部屋にこもりよくパソコンに向かって仕事をしていました。幼かった私は祖父が何をしているのか気になり聞いてみました。すると

「おじいちゃんは、この世の中から原発がなくなるように勉強しているんだよ。」

といました。そう、祖父は大学で教師をしながら、物理学者として「脱原発運動」を積極的に行っていたのです。

祖父は最初科学の進歩に夢を抱き、科学者になろうとしていました。ちょうどその頃、日本は高度経済成長期でした。人の幸せのためにある科学なのに、公害などで苦しんでいる人々の存在に気づきます。その中で祖父が一番関心を持ったのはやはり、放射能が人や環境に影響を及ぼす問題でした。そして祖父は物理学者として原発に反対していきました。

1986年にチェルノブイリ原発事故が起きました。この事故で数十万人が被ばくし、32年たった今も故郷に帰ることができない人々がいます。この時、祖父は現地に行き調査をしました。祖父の部屋にはその時、現地の子供達と撮った写真があります。原発事故が原因でがんと診断され今はもう亡くなってしまった子供達です。祖父の部屋に飾られた子供達の笑顔の写真が今でも私の心から離れません。

2011年には東日本大地震により、福島で原発事故が起きました。この時祖父は、すでにかんを患っていましたが、闘病中の体で何度か福島に行きました。放射能の危険から早く遠くに避難してほしいと呼びかけました。しかし実際には様々な事情からその土地を離れることができない人たちがたくさんいました。つらい思いをしている人達に

「大丈夫ですか？」

などと無責任なことを言えなかったそうです。

また、祖父は様々な本を残しています。その本の中に

「私たちが何気なく差しているコンセントの向こう側で誰かが犠牲になるのではなく、自然の恵みを少しずつ借りて電気を作りたい。」

という文章があります。これを読んだとき私は祖父の事が少しわかったような気がします。祖父は大学の教師を早期退職し、講演活動を続けながら、長崎の田舎でのんびりと暮らしました。自然の中で畑を作って大切な家族と暮らす、そんな当たり前の日常が祖父の考えた「理想の生活」なのだと思います。

祖父が亡くなってからたくさんの手紙が届きました。それらの多くは脱原発運動に参加している人達からでした。祖父は世界中の人の当たり前の生活を守るために、体中いたるところまでがんができてすべての臓器が止まるまで脱原発を訴えていました。行動力があり最期まで自分の意志を貫き通す祖父はたくさんの人から慕われていたのだと思います。

私はそんな祖父の背中を見て育ちました。私も中学生になりこうして祖父の思いを理解できる年になりました。来年3年生になったら私は修学旅行で、祖父のふるさと、長崎に行きます。しっかり原爆について学習し、祖父の思いに少しでも触れたいと思います。

祖父のように大きなことはできないかもしれませんが。しかし私は祖父の思いを継いで、この原発の問題をしっかり考えていきたいです。原発をどうなくすかではなく、原発のない世の中をどう生きるか考えていきたいです。

「波瀾万丈、何もやり残したことはない」

祖父は亡くなる間際に伯母にそう言いました。祖父の思いはきっと、多くの人々に受け継がれていくことでしょう。